

安全に食べるためには

～肺炎予防の努め～

歯科口腔外科にて摂食嚥下障害に対する診療を開始しました。

やじま じゅんいち
歯科口腔外科 矢島 淳一

近年、脳血管疾患を抜いて肺炎が日本人の3番目に多い死亡原因となりました。肺炎死亡者の95%以上が65歳以上の高齢者であり、そのうち半分以上が誤嚥(食べ物が胃ではなく肺に入ってしまう現象)に起因していると言われます。

食べ物がうまくかめない、飲み込めない症状を摂食嚥下障害と言います。摂食嚥下障害は脳卒中や認知症、手足や顔がうまく動かせない神経筋疾患などが原因でおこります。また加齢による各組織の機能の低下も摂食嚥下障害を助長しています。昨今の高齢化社会において摂食嚥下障害の原因を明らかにし、肺炎予防に努めることは健康寿命を伸ばす上で非常に重要です。摂食嚥下障害の診断は、まず患者さんの訴えを聞くことから始まります。

- ・ご飯中またはご飯を食べた後にゴホゴホむせる。
- ・食べ物を飲み込んでも喉にご飯が残っている気がする。
- ・食べた後にガラガラ声になる。
- ・ご飯を食べ終わるのに時間がかかるようになった。
- ・夜に咳で目が覚めることがある。



ほんの一部ですが、上記のような自覚症状がある方は摂食嚥下障害の可能性があります。

誤嚥をおこしたからと言ってすぐに肺炎がおこるわけではありません。からだには免疫機能というものが働いており、そのため若い方が誤嚥してもめったに肺炎になることはありません。しかし免疫機能の低下がみられる高齢者においてはそうではありません。

肺炎になってしまふとその後の生活の質が著しく低下します。それを避けるため早期に摂食嚥下障害に対してしかるべき対応が必要です。

問診や検査を通して摂食嚥下障害の原因をあぶり出していくます。少しでも不安がある方がいましたらお気軽に歯科医師、言語聴覚士までご相談いただければ幸いです。

●お問い合わせ

歯科口腔外科 月曜日、水～金曜日、第1・3土曜日

電話 0261-62-3166(14時～16時)

